

iling, 内側骨折には Bateman type prosthesis を主として施行しているが, 術前合併症は ADL 動作, 早期離床の阻害因子となっている。とりわけ, 老人性痴呆, 心筋障害に対しては, 術前術後にわたる適切な処置及び全身的管理が必要である。また大腿骨頸部の骨粗鬆程度が軽いものは治療成績が良くなる傾向にあることから, 大腿骨骨粗鬆の程度と観血的治療との関連を今後さらに検討していく必要があると考えられる。

52. 老人上腕骨骨折の検討

小林康正, 大井利夫, 木村 純
大西正康, 増田純男, 喜多恒次
(上都賀)

過去10年間に当院にて治療した老人上腕骨骨折につき検討した。上腕骨頸部骨折のうち, 外科頸骨折では骨折線の方向と内反変形の程度が予後と強く関係し, 大結節を含む骨折では骨頭下垂の出現した例で予後不良であった。上腕骨骨幹部骨折では, 老人は筋力が弱いため骨折部にかかる distraction force の対策が必要である。上腕骨顆上骨折では, 肘関節の十分な可動域獲得のため, 手術的な整復固定と早期の運動開始が必要である。

53. 高齢者の骨折手術例の検討

土屋明弘, 今井克己 (千大)

当院における昭和53年より現在までの65歳以上に対する骨折手術は全29例で, 最高年齢は89歳, 平均75.6歳であった。骨折の種類と手術法は大腿骨頸部内側骨折14例に対し Bateman 型人工骨頭置換術12例, スクリュー固定1例, THR 1例。大腿骨頸部外側骨折11例に対し Ender 法10例, Compression screw 法1例が行なわれた。他に大腿骨遠位端, 下腿骨, 上腕骨, 尺骨の骨折が各1例手術が施行され, 全例とも術後経過順調であった。

54. 大腿骨頸部骨折後長期経過例の検討

小沢俊行, 梅田 透 (国立柏)

55. 大腿骨頸部外側骨折に対するエンダーピンの検討

豊田明宏, 篠原寛休, 藤塚光慶
大須英夫, 佐久川博, 平松健一
高橋 弦 (松戸市立)

56. 高齢者の大腿骨頸部外側骨折に対する Ender nailing 法の問題点

永原 健, 土屋恵一, 上野正純
板橋 孝 (県立佐原)

57. 大腿骨頸部外側骨折に対する Dynamic Hip Screw 法と Ender 法との比較

道永幸治, 大木健資, 白土英明
北崎 等 (国立国府台)

当院では, 過去3年半に大腿骨頸部外側骨折の治療法として, dynamic hip screw 法 (D.H.S. 法) 16例と, Ender 法27例を行なった。最初の2年間は Ender 法を中心に, 後の1年半は D.H.S. 法を中心に行い, 骨折型を Evans 分類により, 骨粗鬆度を Singh 分類により検討し, 術後療法の経過, 術後局所合併症などを比較した。更に大腿骨頸部外側骨折治療成績の判定基準を作製し, これを用いて両者を比較検討した。D.H.S. 法は Ender 法に比べて手術侵襲がやや大きい, 全身状態を左右するほどの差はない。治療成績では D.H.S. 法は Ender 法に比べて術後成績が良好であった。

58. 65歳以上の股関節における人工骨頭および全置換例の検討

木元正史, 山中 力, 村田忠雄
上原 朗, 石田 三郎, 野平勲一
佐々木健, 亀ヶ谷真琴 (千葉リハ)

59. 高齢者の関節手術例の検討

武内重樹, 守屋秀繁, 勝呂 徹
(千大)

60. 変性期腰椎後方要素の硬組織学的研究

一椎間関節 Microradiogram を中心に一

佐藤 優, 井上駿一, 後藤澄雄
雄賀多聡, 齊藤康文 (千大)
栗原 真 (川鉄病院)
霜礼次郎 (霜整形外科)

腰椎椎間関節横断面の microradiogram 像において観察される高度石灰化組織は, 通常黄靭帯及び関節包の附着部と関節軟骨下にもみ存在する。しかし変性期においては椎間関節骨梁内部にも異所性の石灰化組織をみとめ, これから我々は移動を伴う骨改造を知ることが可能である。65歳以下の症例では異所性高度石灰化組織を18.8%にみとめたにすぎなかったが65歳以下の症例では50.0%と高率にみとめた。また矢状型椎間関節・沁りを伴う症例, 後方要素の非対称性変化を伴う例でも高率にこの存在をみとめた。